

---

# 愛しき人

河 美子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛しき人

### 【コード】

N59060

### 【作者名】

河 美子

### 【あらすじ】

彼女の名は愛の続編です。

僕は愛と付き合い始めて、半年が経った。

愛は耳が聞こえないが、とても素敵な女性だ。僕たちはアパートも偶然隣同士だし、友達には羨ましいとも、それは大変とも言われる。

確かに僕の友達が来ると、男も女もいるわけだから、当然見ることになる。その度以後で説明するのが面倒になることもある。だからと言って、話さないと愛が気にするような気がしていた。

愛と僕は筆談もするけど、愛が僕の唇を読んでくれるのでほとんどは普通に話している。僕は手話をなかなか覚えることができない。二人で外出すると、みんなの視線をいつも感じるのは偶然だろうか。いや、きっと見られると思う。僕が話すと誰も見ないのに、愛が話すとちらちらと見るのだ。もちろん、ずっとではない。でも、子どもは残酷だ。小学生や園児は指さして話している。

そんなことを愛は気にしないと言うが、きっと気にしてると思う。だって、電車やバスでは愛はほとんど話さない。僕が話しかけるとすぐに眠いと言って目をつぶる。

「さつき起きたばかりだろう」と、初めは笑っていた僕も、愛の気持ちがすぐに分かった。今日は洋画を観に行くことにしていた。僕はいつも字幕のある映画を選んで来た。

最近の映画は迫力満点の音があるが、愛もズンという振動を感じて、ホラー映画などは二人で怯えながら観るのが楽しい。キヤークヤー言う時は、人差し指と中指の間から映画を眺める愛はなんとも可愛かった。

そんな帰り道、居酒屋に寄った。

いつもこの店に来る。小さな店だが、愛のことによく知っているし、何しろ焼き鳥が上手い。

「いらつしゃい」

「いつもの焼き鳥盛り合わせ頂戴」

「はいよー!!」

「それから生ビールね」

座ると隣の席の二人が何やら喧嘩をしているようだ。若い二人は別れ話の真つ最中だった。

「お前の言うことなんか当てにならねえよ」

「あんただって好きなことばかりやってるじゃん。私のことをほつたらかしにして」

僕は嫌な二人の隣に座ったと思ったけど、居酒屋には文句も言えない。

「今日の映画面白かったね」

愛の破裂音で帰って来る言葉は、早速二人の気付くところとなった。それでも、どうってことなく話していたら、こんな言葉が出てきた。

「あんなに可愛いのに、可哀そうだな。でも、ああ言う彼女はいいよな。お前みたいにえらそうなこと言わないから」

「じゃ、探せば？」

背中であら聞いたその言葉に、めちやくちや腹が立って、ビールを掛けてやりたい気分になったが愛の手前知らんぷりを決め込んだ。愛は背中から聞こえる言葉は気付かない。今日の映画の余韻に浸って、楽しそうに話している。僕は顔が引きつりそうだった。

「お客さん、失礼なことを言っではいけません。聞こえる聞こえないの話ではありません」

小さな声だが、居酒屋のマスターが彼の言葉に反応したのだ。

若い二人は、困った顔をしていたが、喧嘩をしていたのに急に

「こんな店は早く出ようぜ」

「うん」

そう言うと、金を投げつけるようにして帰って行った。マスターはブンブンしながら片付けた。

僕がマスターに

「ありがとう」

というと、愛は

『何？』

と、顔の前で人差し指を振った。

「あの二人が喧嘩して言いたい放題だったから、喧嘩は外でやれって言ったの」

と、マスターが笑いながら言った。愛は僕とマスターの間に何か感じたようで、そうと呟いただけでそのまま何も言わなかった。

居酒屋を出ると、星がいつぱいで僕は愛の肩を抱き寄せた。ほろ酔いの僕たちは、アパートまでブラブラ歩くことにした。愛はバッグから手帳を出そうとするから、

「いらない」

と愛を見てゆっくり話した。愛はそんな僕をじっと見ながら、僕の胸に左手を当てた。右手でそっと握った手を二、三度開いた。話してって言ってる。

「僕は君が好きだ」

愛は大きく頷きながら、私もと自分の鼻に人差し指を持って行った。

僕は電信柱に持たれながら、愛を抱きしめキスをした。僕は愛を抱き上げ、部屋に入った。小さな部屋にシングルベッド。二人でそのベッドに寝ると、ギシギシと安物のベッドがうるさい。

「下の人に迷惑だね」

と、下を指さして笑うと、愛は困った顔でベッドから降りようとす。あわてて、僕は

「嘘だよ。何も聞こえない」

と、愛を抱き寄せた。

この世にいろいろな人がいるけど、僕は思っている。

「愛、君とずっと一緒にいたい」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5906o/>

---

愛しき人

2010年10月30日16時46分発行